

中国伝統医学の臨床推論を経験する <中医総合診療研究会>

石川家明^{*1*2}、木村朗子^{*1*2}

*¹TOMOTOMO（友と共に学ぶ東西両医学研修の会）、*²ともともクリニック

臨床経験の浅い医療者にも、経験豊富な医療者と同じような精度で診断ができないかを目指した教育方法が「臨床推論」の技法です。世界の医療教育で広く実施され、近年日本でも急速に教育現場や臨床現場に取り入れられています。

ところが、中医学の弁証推論^{*}が、世界の最先端に位置している臨床推論の診断論理と類似していることをご存知でしょうか。

現代での中医学診療は現代西洋医学診断を無視しては成り立ちません。患者を不幸にするか、自分たちの行った診療の評価も危ういものになるからです。

日常病の一例をあげて以下に説明してみましょう。例えば、「石灰沈着性腱板炎」「腱板損傷」「五十肩」はよく誤診されている「肩痛」です。三者は治り方やその期間の違いがあり、また自然治癒に至る期間も異なります。さらに、湯液や鍼灸治療の反応性も著しく違いがあります。「石灰沈着性腱板炎」は夜間痛を伴う激痛ですが、局所注射で奏功しますので多くの患者が1日から数日で激しい痛みから解放されます。しかし、鍼灸や湯液での治療は、患者は激痛や夜間痛を持ったまま、月～年単位の治療期間を要してしまいます。経済コストばかりではなく、患者の苦しみをいち早く救うという医療倫理面においても、適確な鑑別能力の向上が医療人に求められています。

「腱板損傷」と「五十肩」の治療期間も圧倒的な違いがあります。鍼灸治療の場合、「腱板損傷」の治療期間は「五十肩」の3～4倍以上と見積もることができるでしょう。五十肩の鍼灸治療に要する期間は3ヶ月以内が殆どですから、腱板損傷の治りにくさは推して知るべしです。よって、両者を混同していくには、自分たちの行った治療に対しての正しい評価ができないことになります。

以上のことから、中医学で症例カンファレンスを行う場合でも、適確な西洋医学の診断が前提になると、客観性の乏しいものになってしまうことがわかります。

西洋医学と東洋医学、両者を使って診断推論と弁証推論を行い、どのように日常診療に導入していくのか、実例を挙げてお話しします。また、今回は一方的な講義ではなく、相互交流ができる少人数のワークショップ形式としています。

提示する症例は、日常来院数の多いカゼと称される「風邪」の症例と、整形外科疾患としての「痺証」症例を提示します。最初に西洋医学的アプローチによる臨床推論を行い、次に中医学による弁証推論を行います。簡単で初步的な症例をとおして、中医学の「弁証推論」と西洋医学の「臨床推論」の親和性を体験してみてください。きっと、中医学の先見性に驚くことでしょう。

*ここで中医学での臨床推論を、演者らの造語であるが、あえて「弁証推論」と称しておく。